

# エリザベス・ギヤスケルと ジョージ・エリオットのロンドン

松本 三枝子

## 序 大都市、London を描くことは男性的想像力や経験によるのか

Christine Wick Sizemore は大都市ロンドンを描くことは男性の想像力や経験を必要としていて、20世紀に至るまで女性作家には困難であったとして次のように述べている。

Up until the twentieth century, it was the male imagination and the male experience that shaped the view of the city.... In the nineteenth century, women were confined to the domestic sphere, and even those middle-class women who did write were not free to wander around the city at any hour of the night or day as Dickens did. Nor until the twentieth century did women begin to write about the city. (Sizemore 2–3, emphasis added)

さらに、サイズモアは19世紀の代表的な作家として Brontë sisters や George Eliot を例証としてあげて、彼女たちはほとんどロンドンについては書いていない、Elizabeth Gaskell は都市を描いているが、それはロンドンではなく地方の産業都市 Manchester であると指摘している。

Alexis Easley もエリオットはロンドンで生活し作家として活躍したにもかかわらず、彼女の作品はその生地周辺と結びつけられて “George Eliot Country” と呼ばれているが、ロンドンと結びつけられることは少ないと指摘している (Easley 67)。

20世紀の女性作家を論じる時に、その比較対象として19世紀の女性作家を

用いて両者の違いを強調するというのはよく用いられる方法である。サイズモアもその例に漏れず、余りに19世紀の女性作家が自由を制限された限定的な存在とし過ぎていてのではないだろうか。

本論では19世紀の代表的な女性作家であるギaskellとエリオットがどのように都市を描写しているのか、ロンドンを描いているのかいないのかを2人の複数の作品を取り上げ、それらの詳細な作品分析により明らかにしていきたい。

## I 19世紀の変化する社会、都市を知るために、有効なのは国勢調査か小説か

19世紀の小説家の多くは、なぜ都市を重要なテーマ、あるいは物語空間としたのだろうか。Kathrin Levitan が“Literature, the City and the Census”で指摘するように、田舎から都市への人口移動、貧困問題など、変化する社会状況をありのままに知るために、この時代の多くの知識人は国勢調査に高い関心を持っていた。この論文で、レヴィタンは社会状況の全体像をマクロ的に把握しようとする国勢調査への関心は、産業革命後のイギリス社会が直面した多くの社会問題の解決のために極めて高かったことを指摘している。つまり、多くの知識人が社会構造の変化の全体像を知ることにより、これらの社会問題を解決しようとしていたのである。それに対して、小説家たちは、むしろ個々の人間を見つめ、その物語に耳を傾けようとした。

Sympathy was clearly something that many Victorian novelists wanted to evoke; Gaskell, among others, believed that only through understanding could class conflict be solved. But Gaskell thought that it was by seeing people as individuals, by hearing their stories, that such understanding could be reached. I would like to turn now to George Eliot and Charles Dickens, both of whom were more explicit than Gaskell was about the relationship between novel-writing and statistics. (Levitan 67)

レヴィタンが指摘するように、あくまで社会を構成する個々人への関心を重視

する小説家は、産業革命後のイギリス社会が抱えた社会問題、貧富の格差、労働者運動、階級対立などを解決するために、小説が他にはない重要な役割を果たすことができると認識していた。ディケンズやギヤスケルを始めとする社会小説は、まさにその好例である。

これまでになく社会の激変する状況を、国勢調査により全体的に、統計的に知ろうとする人々に対して、エリザベス・ギヤスケル、チャールズ・ディケンズ、ジョージ・エリオットなどの19世紀の小説家は、あくまでも個人に焦点を合わせ、個々の人間の物語を紡ぐことが当時の社会状況を理解するためには必要と考えていた。そのような小説家にとり、都市は19世紀の人々が直面した社会・政治・経済問題を考えるうえで最適な場であった。

## II Elizabeth Gaskell における都市空間

Raymond Williams は、*The Country and the City* において産業都市を描写するギヤスケルを高く評価している。それによれば、ギヤスケルは同時代の社会問題を扱う場合に、マンチェスターが持っている先駆性を意識して描写していることになる。ギヤスケルの特異性をウィリアムズは次のように指摘している。

The only novelist of the mid-nineteenth century who comes as close as Dickens to the intricacies and paradoxes of city experience is Elizabeth Gaskell. Yet her achievement is different because her city is different—Manchester is at the centre of explicit industrial conflicts in ways that London was not. (Williams 219, emphasis added)

多様な問題が混在するロンドンと、労働者運動や貧富の格差などの社会問題が集中している産業都市との違いは重要である。ギヤスケルにとり意味ある都市空間とは、彼女自身が生活したマンチェスターでの経験に根差した、個人を描き個人の物語を紡ぐことのできる産業都市であったと考えられる。

ギヤスケルの小説では都市は単独で描かれるのではなく、むしろ都市と田舎、町と村、都会と地方とが対比的に描かれる傾向にある。彼女の代表的な作

品、*Sylvia's Lovers*、*North and South*、*Wives and Daughters* に焦点を絞りその対比的描写方法を見てみよう。

最初に、ギヤスケルの対比的描写方法が端的に用いられているのが、『シルヴィアの恋人たち』(1863)である。シルヴィアの恋人として登場する Philip Hepburn と Charley Kinraid の相違が、彼女の家で働く下男の Kester の目を通して対照的に語られる。

田舎男のケスタは、雇い主の娘であるシルヴィアの恋人として、町の男であるフィリップよりも、彼と対照的なキンレイドに好感を持つ。町の住人と田舎の住人、商業に従事する者と農業に従事する者との対立や、嫌悪の意識が前景化されている。

Now, of late, it had seemed to the canny farm-servant pretty clear that Philip Hepburn was “after her;” and to Philip, Kester had an instinctive objection, a kind of natural antipathy such as has existed in all ages between the dwellers in a town and those in the country, between agriculture and trade. So, while Kinraid and Sylvia kept up their half-tender, half-jesting conversation, Kester was making up his slow persistent mind as to the desirability of the young man then present as a husband for his darling, as much from his being other than Philip in every respect, as from the individual good qualities he possessed. (*Sylvia's Lovers* 178, emphasis added)

農場で働く下男ケスタは、町の商店で働くフィリップに対する敵意と嫌悪を感じてしまうため、フィリップとは対照的な人物である鯨の銚打ちのキンレイドをシルヴィアに相応しい結婚相手と考える。ここでは town と country はフィリップとケスタ、フィリップとキンレイドの characterization と深く結びついている。禁欲的で全てに用意周到なフィリップと豪放磊落で女好きなプレイボーイのキンレイドが、極めて対照的に描写されている。結局シルヴィアは地味で質実剛健なフィリップではなく、開放的で人好きのするキンレイドの魅力に引かれて相思相愛になる。

物語の展開では、シルヴィアが突然姿を消したキンレイドと、常に傍らにいて自らにつくすフィリップの間で揺れる一方で、ケスタは一貫してキンレイドを支持する唯一の人物である。捕鯨船に乗船していたキンレイドは、当時の強制徴兵により、海軍に徴兵されてしまい、忽然とシルヴィアの前から姿を消してしまう。キンレイドと結婚の約束を取り交わしていたシルヴィアであるが、やむを得ずフィリップと結婚することになる。この時、ケスタはキンレイドが姿を消して間もないのに、フィリップとの結婚を決意するシルヴィアを次のように非難している。

“Ay, courtin’ ! what other mak’ o’ thing is’t when thou’s gazin’ after yon meddlesome chap, as if thou’d send thy eyes after him, and he making marlocks back at thee? It’s what we ca’ed courtin’ i’ my young days anyhow. And it’s noane a time for wench to go courtin’ when her feyther’s i’ prison,” said he, with a consciousness as he uttered these last words that he was cruel and unjust and going too far, yet carried on to say them by his hot jealousy against Philip. (*Sylvia’s Lovers* 293, emphasis added)

親子ほどの歳の違いがありながらも、ケスタはシルヴィアがフィリップと結婚することに嫉妬に近い嫌悪を感じている。実際にはキンレイドが強制徴兵された事実を知っていたフィリップがそれを隠蔽して、シルヴィアと結婚したことがやがて明らかになり、シルヴィアとフィリップの結婚は破綻してしまう。

つまり、ケスタの2人の男に対する直感は正しかったことになる。もちろん物語の展開は、むしろ事実が明らかになった後のフィリップの悔悛とシルヴィアの許しが重要なテーマとなっている。しかし、田舎男のケスタが町の男であるフィリップに対して持った敵意や嫌悪は、この物語の底流に流れており、田舎の人々が共有する町の人々への不信と敵意は、『シルヴィアの恋人たち』のキーノートとなっている。物語終盤で、フィリップの失踪後に、シルヴィアが夢見ているのも安楽に暮らせる町での生活ではなく、子供時代を過ごした田舎での生活である。

... she had had notions of the possibility of a free country life once more—how provided for and arranged she hardly knew; but Haytersbank was to let, and Kester disengaged, and it had just seemed possible that she might have to return to her early home, and to her old life.... [S]he hoped and she fancied, till Jeremiah Foster's measured words and carefully-arranged plan made her silently relinquish her green, breezy vision. (*Sylvia's Lovers* 397)

つまり田舎育ちのシルヴィア自身が、窮屈な町の生活から離れて、田舎での緑の田園での生活を渴望しているのが分かる。結婚後のシルヴィアを訪ねて来るケスタは、町での彼女の生活に緑の風と香りを運ぶ人物である。夫の失踪後に彼女を実際に援助し世話をするのは、ヘスタやジェレマイアなどの町の人々であるが、シルヴィアはそれにはむしろ無関心である。フィリップが再び彼女と娘の姿を求めて、舞い戻って来た時にたどり着いたのが、ケスタの妹のところであり、そこで彼は息を引き取ることになることから、ケスタという田舎男の存在はこの物語の中で予見された以上に侮れないものとなっている。

次に『北と南』(1855)では、作品のタイトルそのものが、都市と田舎の対比となっている。北とはマンチェスターを想起させる産業都市である Milton を意味しており、ヒロインの Margaret Hale の父が牧師職を退いた後にヘイル家の家族が住むことになる場所である。南とは、そのマーガレットが幸せな子供時代を過ごした、Hampshire にある典型的なイギリスの小村 Helstone である。同時に変化のない退屈な日常と単純な重労働の農業の村は、活気のある産業都市ミルトンと対比して語られている。

さらにロンドンもこの小説には登場し、北と南の中間地点と位置づけられる。そこはマーガレット・ヘイルの叔母一家が住む場所であり、Mrs. Shaw や従妹の Edith Shaw に象徴される上流階級の生活が展開されているが、イーディスの結婚後にはマーガレットの居場所はない。

本論の最初で言及したサイズモアが指摘するように、19世紀の小説に登場する女性たちがロンドンを闊歩したり、女性作家自身がロンドンを逍遙することがあったのかいなかを即断はできない。しかし、少なくとも『北と南』のヒ

ロインであるマーガレット・ヘイルは同時代の小説に登場するヒロインの典型からはいくつかの点で逸脱している。

例えば、語り手は小説冒頭の部分で、従妹のイーデイスとは異なり、美人ではないが個性的で魅力的なマーガレットを次のように描写している。

Sometimes people wondered that parents so handsome should have a daughter who was so far from regularly beautiful; not beautiful at all, was occasionally said. Her mouth was wide; no rosebud that could only open just enough to let out a 'yes' and 'no,' and 'an't please you, sir.' But the wide mouth was one soft curve of rich red lips; and the skin, if not white and fair, was of an ivory smoothness and delicacy. If the look on her face was, in general, too dignified and reserved for one so young, now, talking to her father, it was bright as the morning,—full of dimples, and glances that spoke of childish gladness, and boundless hope in the future. (*North and South* 17)

ここに描かれているマーガレットは個性的ではあるが、*Jane Eyre* や *Villette* のヒロインのような当時の規範からの過激な逸脱はない。彼女は不美人なわけでもないし、男性たちから無視されるような平凡な存在でもない。むしろ彼女は彼女独自の生き生きとした魅力を主張して、従妹のイーデイスの規範に沿った美貌とは好対照を成している。マーガレットは上流階級育ちのイーデイスが社交界の中で華やかに暮らしていることを、少しも羨んではない。イーデイスが私的空間の中で充足しているとすれば、彼女はそこからは明らかに逸脱していく存在である。

なぜなら、彼女もイーデイス同様に弁護士から求婚され、従妹同様に社交界での華やかな生活が可能であったにもかかわらず、これを退けているからである。マーガレットの魅力はそのような彼女の性格描写と一致するように語られている。それは自由で自立した個人としての魅力である。批評家 Hilary Schor も、このようなマーガレットの描写を、“Margaret, from the first, is taller, more queenly, and less submissive than people expect her to be” (Schor 124) と端的に同時

代のヴィクトリア朝の女性に求められた規範からの逸脱を指摘している。このタイプヒロインは、Margaret Oliphant が書いた *Miss Marjoribanks* のヒロインであるルシーラ・マージョリバンクス造形に通じるもので、威風堂々たる男勝りの女性像になり得る。

... she [Miss Marjoribanks] was large in all particulars, full and well-developed, with somewhat large features, not at all pretty as yet, though it was known in Mount Pleasant that somebody had said that such a face might ripen into beauty, and become “grandiose,” for anything anybody could tell. (*Miss Marjoribanks* 26)

これが10代のルシーラの風貌である。彼女はディケンズのヒロインのように脆弱でもなければ、ジョージ・エリオットのヒロインのように男性にコンプレックスを抱いてなどいない。『マージョリバンクス嬢』の出版が1866年であることを考えると、ルシーラの造形はこの時代の「当世風娘」(the girl of the period)に通じるものと考えることができる。

しかし、ギaskellのマーガレット・ヘイルはそれよりも10年は早く描かれているので、極めて新しいヒロイン像といえるのではないだろうか。それはこの小説の中での彼女の活動領域の広さについてもいえることである。前述したヒラリー・ショーはマーガレットが英国内を自由に動きまわっていることに言及して次のような分析を展開している。

[W]e also have ... a new attention to a progress across England and back again, from London to the South, to the North, back to the South, briefly back North, and back to London—a wider sweep than Gaskell had earlier attempted, and a wider path for a heroine to travel. In contrast to novels like *Middlemarch* ... we might notice that in Gaskell's, the heroine need not leave England to attain her wider vision; her voyage covers, instead, a range of classes (and discourses) not available to Dorothea, Gwendolen, and others. (Schor 124)

ここでショーは二つのことを同時に述べている。ひとつは、マーガレットが持っている行動力の特徴である。もうひとつは、その活動力により彼女が獲得することになるより広い認識についてである。『ミドルマーチ』の女性登場人物たちよりも、彼女がより自由であるのは、ある意味では当然である。なぜなら、『ミドルマーチ』は出版されたのは1870年代であるが、この小説の舞台は1830年頃であるからだ。この小説に登場する Dorothea Brooke は明らかに19世紀初期の女性として描かれている。

しかし、マーガレットが自由にイギリスを旅しているというショーの指摘は重要であるが、彼女が階級を超えて歩き回るのは、父が牧師をしていたヘルストーンの村と、産業都市のミルトンであって、ロンドンではない。『北と南』とほぼ同時期に書かれた Mary Elizabeth Braddon の *Lady Audley's Secret* (1862) には、マーガレットに優るとも劣らないほど活動的に、英国内を動き回るヒロインが登場する。ただこのヒロインが一人で英国内を動き回るのは、自らのアイデンティティを隠すことを余儀なくされているためである。1860年代はイギリスでこのような大胆なヒロインが登場する煽情小説が大流行した。これらの小説に登場する女性たちは同時代の女らしさの規範からは逸脱しているのは当然であるが、そのような行動力が女性たちに可能になったことも見て取れる。ヴィクトリア朝中期には、女性たちは鉄道や馬車を使って、英国内を動き回ることが可能であった。ただし、それが当時の女らしさの規範に沿ったものであったのかどうかは別にしてである。

それでは、ギヤスケルの最後の小説であり未完となった『妻たちと娘たち』(1865)における都市空間及びロンドンがどのように描かれているのか詳細に見ていこう。この小説の時代背景は、ジョージ・エリオットの『ミドルマーチ』と同じ第一次選挙法改正直前の地方である。ギヤスケルはこの小説を“moral contrast”を用いて描いている。例えば、Roger Hamley と Osborne Hamley、Mr. Gibson と Mrs. Gibson、そして Molly Gibson と Cynthia Kirkpatrick である。特に対照的に描かれてもいる2人の女性であるモリーとシンシアにここでは注目をしたい。モリーが小説の舞台となっている地方の町 Hollingford を象徴する女性として、様々な苦勞や誤解に見舞われながらもここで生き抜こうとしてい

るのに比較して、ホリングフォードでは生きていけないのがシンシアである。なぜなら彼女の人生には謎や矛盾があり、ここに居続けることでそれが露呈されることになるからである。

子供時代から母親に愛されたことがないシンシアにとり、Mr. Preston からの金銭的な援助は必要なものであり、それが2人の関係を深め、彼との結婚を約束することになってしまう。この秘密の関係を解消することなく、ロジャーとの婚約はあり得ないのだが、彼女はむしろ後者との婚約を公にしないことにより、その破綻を回避しようとする。シンシアは過去の秘密が暴露されそうになるとロンドンに退避する。このように2人の男と婚約することが可能になるのは、彼女が魅力的であるからのみならず、彼女の人生が不透明で、通常の解釈を逸脱してしまっているからだ。シンシアはある意味では、ホリングフォードの人々の価値観や倫理観では読み切れない謎の女性である。彼女の謎は、隠された過去にあり、Lyn Pykett が指摘している次のような煽情小説のヒロインの造形につながるものである。

... the sensation novel habitually focuses on the secrets and secret histories of women. All of Mary Elizabeth Braddon's early novels are structured around women with a concealed past: women who, for a variety of reasons, conceal their present motivations and desires, and who have a hidden mission which drives their lives. In most cases these feminine concealments both result from, and foreground, a tension between the proper and the improper feminine. (Pykett 84)

特に、『妻たちと娘たち』のクライマックスでは、このシンシアの謎を解消するために、モリーがプレストン氏と交渉することになり、そのことでホリングフォードの人々から誤解され、モリーの倫理と道徳が疑惑的となる。しかし、それまでのモリーの誠実さを知っている Lady Harriet のような人々からの信頼により、疑惑的はモリーではなく、シンシアであることが明らかになる。そしてそのシンシアを描く時にロンドンは極めて有効に用いられていることを次の引用から理解できる。

For she [Miss Browning] had got many of her notions of the metropolis from the British Essayists, where town is so often represented as the centre of dissipation, corrupting country wives and squires' daughters, and unfitting them for all their duties by the constant whirl of its not always innocent pleasures. London was a sort of moral pitch, which few could touch and not be defiled. Miss Browning had been on the watch for the signs of deterioration in Cynthia's character ever since her return home. (*Wives and Daughters* 475)

Miss Browning のようにロンドンは放蕩の中心地であり、道徳上の汚点であるとする見方があることが確認できる。また、シンシアのような謎の女性が、そのような危険にもっとも近い人物であることは間違いない。

しかし、この小説におけるブラウニング嬢は母のいないモリーにとりシャペロンとなる人物であることから、ロンドンに対するブラウニング嬢のイメージはやや時代遅れの見方と解釈できる。ワールドクラシックス版の『妻たちと娘たち』の注釈者である Angus Easson も “the British Essayists” とは、*Tatler*、*Spectator*、*Rambler* などの18世紀の雑誌をまとめて本として再版されたものであることを明らかにしている (*Wives and Daughters* 721)。レイディ・ハリエットとは異なり、ブラウニング嬢がシンシアの秘密を看破したり、モリーに対する誤った中傷を正すことができるわけではない。つまり、ブラウニング嬢のロンドン観は言及されてはいるが、必ずしも支持されてはいないのである。

加えて、物語結末では、シンシアの秘密はモリーの尽力により解消され、弁護士と夫と共にロンドンで結婚生活をおくることになる。一方モリーも教授職に就くロジャーとの結婚生活をロンドンで過ごすことになり (*Wives and Daughters* 684)、専門職を仕事とする新しい中産階級の活躍する場所として、ロンドンが前景化されている。

### III ジョージ・エリオットにおける都市空間

Nancy Paxton は、Girolamo Savonarola の時代の Florence を舞台にしたエリオットの唯一の歴史小説である *Romola* を分析するにあたり、エリオットと都

市の関係を次のように述べている。

Eliot's unwillingness to depict the urban life of a heroine as creative and unconventional as she was herself has seemed a puzzling, provoking, and—for some readers—an unforgivable omission in her fiction, but her silence seems to reflect her feelings that cities in general and London in particular were somehow threatening. (Paxton 71)

このパクストンの分析は、本論の冒頭で引用したクリスティン・サイズモアによる19世紀の女性作家はロンドンを自由に歩き回れず、この大都市を描くことができなかったという見解に通じるものである。『ロモラ』で描かれる15世紀のフィレンツェとヒロインであるロモラの関係进行分析していくことで、エリオットの大都市の描き方を見ていくことにする。

この小説で特徴的なのは、女性であることが明らかに被抑圧的存在、従属的存在であることが何度も強調されていることである。例えば、ロモラは跡継ぎを望んでいる父にとり、亡き兄の代理にはなれず、父の後継者を得るために結婚することになる。結婚により父の義理の息子として相続人となった Tito Melema ではあるが、ロモラを裏切り Tessa という田舎娘と重婚している。父や夫という男性権力の抑圧から自由になるために、ロモラが決行するのがフィレンツェからの脱出であるが、それを抑止しようとするのが、修道士のサヴォナローラである。尼僧の姿で町を出ようとするロモラを、次のように彼が呼び止める。

“It was declared to me who you were: it is declared to me that you are seeking to escape from the lot God has laid upon you. You wish your true name and your true place in life to be hidden, that you may choose for yourself a new name and a new place, and have no rule but your own will. And I have a command to call you back. My daughter, you must return to your place.” (*Romola* 428–29)

ロモラが尼僧に偽装したのは、それが唯一女性が自由に歩き回れる姿であったからだ。上記のようなサヴォナローラの言葉に抵抗し、激しい憤りをロモラは感じている。パクストンは都市あるいは都市の文化を男性中心の文化とみなし、ロモラがそこから脱出しようとすることを自立や自由への逃亡と分析している。

She[Eliot] presents two dimensions to Romola's entrapment by urban culture: the legal subordination imposed on her because she is a daughter, a wife, and a citizen of Florence, and the "moral imprisonment" that confines her because she is, by definition, the subject rather than the maker of the art and literature that surround her in this great center of Renaissance culture. (Paxton 75)

パクストンの分析は明らかにフェミニズム批評としてこの小説におけるロモラの行動を的確に分析したものとなっている。そして、15世紀のフィレンツェという都市が象徴する男性的権力をこの小説は暴露している。さらに、そのような都市を尼僧に偽装することにより脱出することを余儀なくされたロモラの被抑圧の状況は、ヴィクトリア朝の女性たちがおかれた状況に通じるものとなっている。つまり、『ロモラ』では、19世紀のロンドンのような主要都市であった15世紀のフィレンツェにおいて、通常では女性には動き回ることとはできなかったのが、ロモラは尼僧に偽装することにより自由を獲得し行動したことになる。

次に論じたいのは、エリオットの最後の小説である *Daniel Deronda* (1876) である。レイモンド・ウィリアムズは、ジョージ・エリオットの *Adam Bede*、*Felix Holt* などを限定的にはあるが評価しながらも、この小説を次のように批判している。

The country action of George Eliot's *Daniel Deronda* takes place in Wessex. But whereas the Loamshire and Stonyshire of *Felix Holt* had been George Eliot's England, the Wessex of *Daniel Deronda* might be Jane Austen's Hampshire or

Derbyshire: the great and the less great houses, and the selected 'knowable community', as it is to be found again later in Henry James and in other 'country-house novels' of our own century. (Williams 176)

『ダニエル・デロンダ』をジェイン・オースティンの小説の系譜に位置づけ、選ばれたわかる社会を描いていると分析している。確かに、この最後の小説である『ダニエル・デロンダ』がそれ以前のエリオットの小説とは異なっていることは事実である。しかし、「カントリー・ハウス小説」という分類でこの小説を括ろうというのは適切ではない。

本論の冒頭で述べたように、19世紀のイギリス社会は多様な問題を抱えていた。エリオットがこれらの社会問題を小説の中で積極的に捉えようとしたことは、彼女の小説を読むとよくわかる。しかし、同時代の全ての社会問題を単独の小説の中に盛り込むことができないのは自明のことである。彼女の小説の特徴は、描かれている小説世界の広さであり、その意味では、上記のオースティンのような小説世界とは異なるものである。このようなそれまでのエリオットの小説とは異なるのが、最後の小説『ダニエル・デロンダ』であることは確かである。『ミドルマーチ』が、地方の町であるミドルマーチを舞台に物語が展開し、そこに住む極めて多様な人々、階級や職業を横断的に描きパノラマのような展望を読者に与えているとすれば、『ダニエル・デロンダ』では、英国という社会が客観的に展望されているというべきであろう。それゆえ、作品のタイトル・ヒーローはイギリス紳士として育てられたユダヤ人のダニエル・デロンダである。

物語が複雑なので簡単にあらすじを述べておきたい。美しいが自己中心的なイギリス娘グウェンドレン・ハーレスを中心に繰り広げられるイギリス中産階級の物語と、ユダヤ人としての出自を隠されイギリス紳士として育てられたダニエル・デロンダが、ユダヤ人の Mirah Lapidoth やその兄 Mordecai Cohen と出会うことで自らのアイデンティティを回復し、シオニズム運動に加わっていく物語とが相互に照らし合うように語られていく。個人と社会、個人と伝統の在り方が探求され、有機的な個人と伝統の関係を維持するユダヤ社会を提示す

ることにより、同時代のイギリス社会を痛烈に批判している。

デロンダとマイラの出会い、デロンダとモーディカイの邂逅は、いずれもテムズ川を重要な情景としている。つまり、イギリス紳士として育てられたデロンダとユダヤ人である彼らとが偶然に出会う場所としてテムズ川が選択されている。

ディケンズ や Charles Baudelaire がロンドンやパリを逍遥したように、デロンダもロンドンを逍遥する。デロンダは子舟を漕いでロンドン市内を逍遥し、夕刻の一時を過ごすという習慣をもっている。イギリス紳士として何不自由なく育てられているのだが、彼には係累がない、伯父とされている人物の相続人は、自分ではなく他の甥であることから、それは分かる。自分は誰なのか、どこからきたのか、物心ついた時から彼には悩ましい問題であった。自らのアイデンティティや帰属が定まらぬ、デラシネのように孤独なデロンダが物語では語られる。そのようなデロンダにとりテムズ川でのひとときは自己解放と癒しを与えるものとなっている。重要なことは、デロンダの場合はロンドンを歩きまわるよりも、舟でテムズ川を移動することが特徴である。そのようなデロンダとユダヤ人の兄妹との出会いの場面を見ていこう。

最初は、Kew Bridge の辺りで デロンダとマイラの初めての出会いの場面である。出会いというよりは、遭遇という方が適しているかもしれない。デロンダが夕刻の一時を川の流れに任せた舟で瞑想にふける時、向こう岸に人生に絶望し入水自殺を図ろうとするマイラを見つける。

Deronda, awaiting the barge, now turned his head to the river-side, and saw at a few yards' distance from him a figure which might have been an impersonation of the misery he was unconsciously giving voice to: a girl hardly more than eighteen, of low slim figure, with most delicate little face, her dark curls pushed behind her ears under a large black hat, a long woolen cloak over her shoulders. (*Daniel Deronda* 227)

哀れを具現化したようなマイラの頼りなげで美しい姿に心を動かされ、デロン

ダは見ず知らずの彼女を救い、その後も彼女の唯一の血縁である兄探しを手伝うことになる。通常であれば、出会うことのない階級差が、デロンダとマイラの間にはあるが、デロンダのテムズ川の逍遙が、この2人を出会わせる機会を与えている。そして、さらに重要な川での出会いは、マイラの兄とデロンダの出会いである。

デロンダはマイラの兄を捜してロンドンのユダヤ人社会に入り込んでいく。この時点では、デロンダはまだ自らがユダヤ人であることは知らされていないが、偶然出会ったユダヤ人モーディカイのユダヤ教や、カバラ思想に惹かれていく。そして、親しくなったモーディカイを訪ねてテムズ川を下っていくデロンダが、橋の上にモーディカイを見つける次のような場面がある。

For Deronda, anxious that Mordecai should recognise and await him, had lost no time before signalling, and the answer came straightway. Mordecai lifted his cap and waved it—feeling in that moment that his inward prophecy was fulfilled. Obstacles, incongruities, all melted into the sense of completion with which his soul was flooded by this outward satisfaction of his longing.... The prefigured friend had come from the golden background, and had signalled to him: this actually was: the rest was to be. (*Daniel Deronda* 550, emphasis added)

この Blackfriars Bridge での、デロンダとモーディカイの出会いは、2人の個人の出会いに留まらず、ユダヤ教の伝統がモーディカイからデロンダへと伝えられていくという、ある意味で、時空を超えた伝統の継承を象徴する場面となっている。ユダヤ民族における伝統と個人の関係、カバラ思想に精通するモーディカイの影響から、デロンダは母親から突然告げられたユダヤ人としての出自を受け入れ、アイデンティティを回復していく。余命幾ばくもないモーディカイが自らの思想の後継者となるデロンダと出会うことができるのがロンドンである。個人が逍遙と瞑想を経て、帰属やしがらみ、時空までも超えて、自らのアイデンティティを回復することができるのが、metropolis としてのロンドンである。

つまり、エリオットは『ダニエル・デロンダ』において、大都市ロンドンが持つ象徴性を十分に認識して、デラシネのデロンダが、自らの出自を知りユダヤ人としてシオニズム運動に参加するために東方へと旅立つ物語を書いている。

## 結 び

産業革命の成功や、自由経済主義、功利主義の普及により19世紀のイギリス社会が抱えた社会問題である労働者運動、貧富の格差などを提示するため、エリザベス・ギヤスケルには、多くの政治・経済問題が混在するロンドンではなく、先駆的な産業都市であるマンチェスターが最適な小説の舞台であった。加えて、『北と南』のヒロインであるマーガレット・ヘイルは自由に英国を動き回る女性である。それは彼女がミルトンにおいて階級の境界を超えて労働者階級の家の中に入り込んでいることにも現れており、彼女が自由で自立した個人として描かれていることを示している。しかし、彼女が歩き回るのは、地方都市や故郷の田舎であり、ロンドンではない。『妻たちと娘たち』において、対照的な登場人物として描かれているモリーとシンシアが共に結婚後に住む場所がロンドンであることは注目すべきことである。ブラウニング嬢のようにロンドンを放蕩の中心地、あるいは道徳上の汚点とする見方がある一方で、ロンドンが新しい中産階級である弁護士や教授などの専門職業人が活躍できる場所として、新しい可能性を持つ場所として提示されていることを指摘しておきたい。

他方、エリオットにとりロンドンは、特に最後の作品である『ダニエル・デロンダ』においては、個人が日常性から解放されて、自らのアイデンティティを回復することができる特別な時空となっている。個人は、イギリスやロンドンという帰属や、日常性を超えて、*cosmopolitan* としての存在へとつながることが可能である。しかし、それは自由ではあるが、同時に流浪の旅の始まりということにもなる。つまり、エリオットは、19世紀のロンドンが持っていたそのような都市が持つ象徴性を十分に認識して、『ダニエル・デロンダ』で描いている。

\*本論は、2012年10月6日に開催された日本ギaskell協会第24回大会（於中京大学）のシンポジウム「19世紀イギリス小説と都市空間——ギaskellから世紀末」において、「エリザベス・ギaskellとジョージ・エリオットのロンドン」として研究発表したもの的大幅に加筆修正したものである。

## References

- Blair, Emily. "The Wrong Side of the Tapestry: Elizabeth Gaskell's *Wives and Daughters*." *Victorian Literature and Culture*. 33 (2005): 585–597.
- Boiko, Karen. "Reading and (Re)Writing Class: Elizabeth Gaskell's *Wives and Daughters*." *Victorian Literature and Culture*. 33 (2005): 85–106.
- Butler, Marilyn. "The Uniqueness of Cynthia Kirkpatrick: Elizabeth Gaskell's *Wives and Daughters* and Maria Edgeworth's *Helen*." *Review of English Studies*. ns. 23, 91 (1972): 278–90.
- Easley, Alexis. *Literary Celebrity, Gender, and Victorian Authorship, 1850–1914*. Newark: U of Delaware P, 2011.
- Eliot, George. *Daniel Deronda*. Ed. Barbara Hardy. Harmondsworth: Penguin, 1967. 淀川郁子（訳）『ダニエル・デロンダ』松籟社、1993.
- . *Middlemarch*. Ed. W. J. Harvey. Harmondsworth: Penguin, 1965. 工藤好美・淀川郁子（訳）『ミドルマーチ』講談社、1998.
- . *Romola*. Ed. Andrew Sanders. Harmondsworth: Penguin, 1980. 工藤昭雄（訳）『ロモラ』集英社版世界文学全集40、集英社、1981.
- . "The Natural History of German Life." *Essays of George Eliot*. Ed. Thomas Pinney. New York: Columbia UP, 1963.
- Gaskell, Elizabeth. *Sylvia's Lovers*. London: Smith, Elder, 1889. 鈴江璋子（訳）『シルヴィアの恋人たち』ギaskell協会監修、ギaskell全集5、大阪教育図書、2003.
- . *North and South*. Ed. Angus Easson. Oxford: Oxford UP, 1982. 朝日千尺（訳）『北と南』ギaskell協会監修、ギaskell全集4、大阪教育図書、2004.
- . *Wives and Daughters*. Ed. Angus Easson. Oxford: Oxford UP, 1987. 東郷秀光、足立万寿子（訳）『妻たちと娘たち』ギaskell協会監修、ギaskell全集6、大阪教育図書、2006.
- Law, Jules. *The Social Life of Fluids: Blood, Milk, and Water in the Victorian Novel*. Ithaca: Cornell UP, 2010.
- Levitan, Kathrin. "Literature, the City and the Census: Examining the Social Body in Victorian Britain." *Gaskell Society Journal*. 20: 60–72.

- Paxton, Nancy L. "George Eliot and the City: The Imprisonment of Culture." *Women Writers and the City: Essays in Feminist Literary Criticism*. Ed. Susan Merrill Squier. Knoxville: U of Tennessee P, 1984.
- Pykett, Lyn. *The 'Improper' Feminine: The Women's Sensation Novel and the New Woman Writing*. London: Routledge, 1992.
- Schor, Hilary M. *Scheherezade in the Marketplace: Elizabeth Gaskell and the Victorian Novel*. Oxford: Oxford UP, 1992.
- Sizemore, Christine Wick. *A Female Vision of the City: London in the Novels of Five British Women*. Knoxville: U of Tennessee P, 1989.
- Williams, Raymond. *The Country and the City*. New York: Oxford UP, 1975.